写真:広島東洋カープ

首脳陣の評価も高い、
若鯉の一番星

塹江敦哉 36

Atsuya Horie

（2014年ドラフト3位／2年目／19歳）

ルーキーイヤー、二軍でのデビュー戦で、いきなり147キロをマークした。高松北高時代は甲子園出場こそならなかったが、左腕からの快速球に各球団スカウトの注目度は高かった。

それだけではない、落ち着きすら感じさせる19歳は実にクレバーなのである。「高松北高は進学校」「ザガースキーが認めた英語力」などエピソードに事欠かないが、やはり「野球頭脳」である。

２年目を迎えて、塹江敦哉は冷静に課題を語った。

「最低限のラインを上げることです。練習では１球１球に良い感触が出てきました。意識の変化も持てるようになりました。これまでは、ストライクが入らなくなったら、ストライクゾーンに入れようとばかり考えていました。しかし、そこをどうするかです。最低限どうするかということを考えられるようになりました」

１年目、ウエスタン・リーグでの登板は７試合、主に「体力強化」に時間を割いてきた。ただ、クレバーな19歳は、その意図を明確に把握して練習に臨んできた。

「考え方」と「基礎体力」。強固な石垣があってこそ、本格派左腕の天守閣である。投手王国新時代、そのど真ん中で、背番号36は躍動するはずである。